

〈教育実践記録〉

学校現場体験・教育（保育）実習を視野に入れた初年次教育の取り組み
—「教育学基礎演習Ⅰ」における小学校・こども園見学—

平野晶子・豊田千明・鶴田麻也美・松本淳・歌川光一

1. 教職課程の初年次教育

本学科の「教育学基礎演習Ⅰ」は、教育・保育学を学ぶ大学生としての基礎的スキルを身につける初年次科目として位置づけられている。授業の目標は①教育学を学ぶ大学生としてどのような心構えで学ぶべきかを知る、②大学生に求められる授業を受けるための基礎的スキルを身につける、③大学生に求められる研究を行うための基礎的スキルを身につける、④教育保育現場での観察の視点と方法を身につける、の4点である。本稿では④の取り組みとして、平成30年度より開始した小学校・こども園見学の概要を記す。

教員・保育者養成課程の初年次教育として現場見学等を行うことの意義は、服部（2015）等でも触れられている。本学科でも従来から、学寮研修等の機会を通じて初年次生への学校現場体験や教育実習を意識した指導が実施されてきたが、この指導を「教育学基礎演習Ⅰ」の一部として体系化し直すことで、学生たちが次年度以降の学校現場体験や教育・保育実習をより円滑に進められるよう企図した。

2. 初年次教育における小学校・こども園見学

- 【見学先】 昭和女子大学附属昭和小学校、昭和こども園
- 【実施日】 平成30年12月11日（火）12：50～13：45
- 【参加学生】 昭和女子大学人間社会学部初等教育学科1年次生、児童教育コース50名（小学校引率教員：鶴田・平野）、幼児教育コース66名（こども園引率教員：歌川・豊田・松本）
- 【事前・事後指導】 コース別ガイダンス 平成30年12月4日（火）、リフレクション 平成30年12月18日（火）

3. 見学の方法と課題

3-1. 小学校

ほぼ全員の学生にとって小学校での授業参観は初めてであるため、三つの方法で活動の記録をとることを促した。第一に「教室環境」の記録である。学級には教員と児童で作り上げる「学級文化」があり、それが教室環境に現れる。最も端的に教室環境を示す掲示物に着目させ、その一つひとつに児童への配慮や指導の目的があることを確認し、意図を推察しながら環境のスケッチを行うよう指導した。第二に「エピソード」の記録である。気にかかる児童の様子その瞬間を記録し、観察し得た事実から児童の気持ちや考えを推察する課題を与えた。教員として個々のエピソードをどう読み取り、関わるかを考える契機となり、児童理解の根本につながる。第三に「授業記録」、時系列の逐語録である。授業は授業者（教員）と児童の間に生じる言語・非言語のやり取りによって成り立つ。この記録に関して、事前指導では以下の2視点を示した。

- ① 「授業者を観る」発問を含めた教員の言動やしぐさ（目の動きや手の動き、体の向き等）に注目する。効果的な在り様やふるまい、また、指導案等に記されない授業の重要な要素の理解につながる。
- ② 「児童を観る」教師の働きかけに対する児童の反応を観察する。どのように学びを紡いでいるかを理解し、児童の実態に合った授業を行うために必要な展開力や省察力を育てることにつながる。

3-2. こども園

事前指導時にグループ（5名程度）ごとに発達段階を意識したテーマを立て、見学時にはこども園舎において3～5歳児の自由遊びの参観を行い、また保幼小

連携を意識づけるために合間を見て隣接している小学校において低学年の授業を見学した（15分間程度）。見学直後の記録に基づき事後指導でカンファレンスを行った。

保育者養成の高学歴化（四大進学化）の背景の一つに、「やりたいことがまだはっきりしていない層が増えている」（両角 2016: 270）ことが指摘されている。また、教育実習前の学校現場体験が、自身の適性に疑問を抱く場となるという研究報告もある（歌川・鈴木 2016: 77）。これらの背景を意識した上で、本授業の目標（1.の①～③）との整合性に鑑み、子ども理解や教員・保育者としての意識づけ以前に、子どもと自然に遊びながら2種類の記録をとる経験を蓄積することに力点を置いた。具体的には、事前指導で遊びの記録（文部科学省 2013: 18-19）、エピソード記述（鯨岡・鯨岡 2009）の「エピソード」「考察」の趣旨を説明、参観直後に大学の教室にてメモを取り、事後指導時まで清書するという流れとした。

初年次学生が記録をとる際、「事実」と「意見」の書き分けは容易ではない。そこで事後指導では、遊びの記録を記入する際に、とりわけ主観が入りやすい形容詞、形容動詞を多用していないかを確認した。またエピソード記述についても、一度目の考察の記入が不十分であると、カンファレンス自体が成立しづらくなることを確認した。

4. 成果と課題

初めての教育・保育現場での見学は学生たちには非常に魅力的で、高い充実感、満足感をもたらす。今回も見学後、気分的にも高揚している学生が多く見られた。一方、そもそも子どもとどのように接してよいか躊躇する学生や、事前に立てたテーマに基づいた参観を行うことの難しさを感じた学生も見受けられた。特に幼児教育コースの学生については、「友人や先生が見ている」という大学生としての自意識が、子どもと関わる貴重な時間を奪ってしまうことを自覚し得たという経験のみをとっても、一定の意義は見いだせるものと思われる。

【参考文献】

- 服部次郎（2015）「保育者・教師養成過程における初年次教育としての施設（学校）見学を充実させる事前・事後学習の実践のその後の専門教科への影響について—学生の主体的学びの促進を目指した授業での試み—」『椋山女学園大学教育学部紀要』巻8, pp. 179-192.
- 鯨岡峻・鯨岡和子（2009）『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房.
- 文部科学省（2013）『幼稚園教育指導資料第5集 指導と評価に生かす記録—平成25年7月—』チャイルド本社.
- 両角亜希子（2016）「高校生の進路選択から見た保育者養成の高学歴化の背景」『東京大学大学院教育学研究科紀要』56巻, pp. 263-271.
- 歌川光一・鈴木翔（2016）「教育実習と学校ボランティアの関連性をめぐる研究動向とその課題—教職志望学生の予期的社会化の観点から—」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第18号, pp. 73-81.

（ひらの あきこ 初等教育学科）
（とよだ ちあけ 初等教育学科）
（つるた まやみ 初等教育学科）
（まつもと じゅん 初等教育学科）
（うたがわ こういち 初等教育学科）